

心造少女

1

# 第一章

その天使は白い長い着物を着て、肩から足までもとどくつばさをはやして、顔付きはまじめに、いかめしく、手にははばの広いぴかぴか光る剣を持っていました。

「いつまでも、お前は踊らなくてはならぬ」と、天使はいいました。

「赤いくつをはいて、踊っておれ。お前が青じろくなくなって冷たくなるまで、お前のからだがしなびきって、骸骨になってしまいうまで踊っておれ。お前はこうまん、いばったこどもらが住んでいる家を一軒、一軒と踊りまわらねばならん。それはこどもらがお前の居るところを知って、きみわるがるように、お前はその家の戸を叩かなくてはならないのだ。それ、お前は踊らなくてはならんぞ。踊るのだぞ」

(ハンス・クリスチャン・アンデルセン『あかいくつ』より)

## 1

その飛行機は、嵐の中を飛んでいた。

ニュートが目覚めると、まだ小刻みな震動が腰元から体を揺らしていた。それは機体の流線型の鼻面が、分厚い雨雲を割り砕く際に生じる衝撃の連続だった。高度一万メートルの水蒸気。その粒の一つ一つが、顔のすぐ右横を窓ガラス越しに通る過ぎる度、子どもの笑い声のようなものが、曇天の中から囁いては消える。

しかしそれは彼が学生の時分にハイスクールで習った常識——この世界を循環する水、その殆どに微細資源フエアリースケールが行き渡っている——が喚び起こす、幻聴の類に過ぎなかった。妖精の声を聞いた者、聞ける者は、未だこの世界には存在しない。それは人間でも、そしてモドキであつてもそうだ。耳を澄ませても、聞こえるのは雨粒が機体の分厚い窓や壁を叩く音だけだ。

強い喉の渴きを覚えて、すぐにニユートは手元の肘置きにあるパネルに触れた。そして視線を、照明の絞られた通路へと向ける。

彼が腰掛けている座席は、この小型旅客機の後方に位置していた。他の乗客は彼を含めて五、六名ほどが、左右二席ずつの機内にまばらに腰掛けている程度だった。全員、彼と同じように眠っているのか、離陸前後で大はしゃぎをしていた子どもの声も聞こえない。

ふと、この機体の航路は悪天候が予報されていたから、キャンセルが多かったという話を思い出す。現代に隆盛する妖精技術フェアリーテクノロジーの手にかけられれば、この程度の天候は恐るるに値しない。だが悪天候、それがもたらす不吉な予感を、無視できる者はそう多くはなかった。

程なくして、通路の暗がりから人影がこちらへと歩んでくるのが見えた。一般向けの安価な輸送サービスに比べ、ゆとりと贅を以て設計された比較的上層向けの旅客機、そのサービスを担うアテンダントはやはり上等だ。身じろぎをし、今朝ホテルのクリーニングサービスから受け取ったシャツが、新たな皺を得る小気味よさを感じながら左腕を上げる。

『何かお手伝いできることはありませんか』

「水、いや、冷たいコーヒーが良い。ブラックで」

『かしこまりました』

中肉中背、汚れのない清潔なシャツに、モスグリーンの航空会社のエンブレム付ベストを羽織った、非の打ち所がない美男子。そんな風体のアテナダントに用件を告げる。彼は笑みを浮かべながら応答し、その懐からまるで魔法のようにポットを取り出して、手袋を嵌めた反対の手のグラスに琥珀色の液体を注ぐ。からりと、いつの間にかグラスに放り込まれていたロックアイスが涼し気な音を立てた。『お待たせ致しました』

「ありがとう」

航空会社の広告で目にする「おもてなしこそが我らの喜び」という文句を体現するかのような態度。設計思想通りの挙動。だが完璧過ぎる振る舞いは、返って人間の居心地を悪くさせる。それを心得てか、青年はそれまでの殷勤な態度を崩

すように、ウインクを残して歩み去った。

それすらもまた設計通りの挙動であると知っていても、ニュートは自身の居住まいを許されたような安堵を得た。かつての納品物は、問題なく動作している。

——自律機械技師としての己の仕事の成果を、ニュートは確認した。あのアテンドントは、この機内から外に出ない。数ヶ月に一度の、メンテナンスの時を除いて。

サービスマスの殆どが、人類の領分から撤退してから既に久しかった。一世紀程前までは労働人口の殆どを、飽くなきサービスレベルの充実に費やしていたあの極東の島国の人間たちでさえ、海面上昇による国土、人口の減少を受けてからは、そのライフスタイルには大きな変化を余儀なくされた。

人工物に出来ることは、人工物に代替してもらおう。少なくとも、人類の手によるサービスの付加価値など、人工物によるそれが遥かに劣っていた時代の遺物

だった。理想的な学習能力、理想的な耐久性、そして理想的な容姿を持ち合わせた人工物によるサービスは、あつという間に、繊細な感覚を要しない定型的な作業の殆どを、人類の手から奪い去った。

今や人類の領分といえ、彼らを監督し、価値判断を行う程度のものであった。不完全情報によるイレギュラーの多い優先順位プライオリティの判断は、並列処理能力パラレルプロセッシングを追及されてきた人工存在が、唯一未だ苦手とする分野だった。

しかしそれは、人類があえて彼らに与えていない能力なのかも知れなかった。生産活動における自分たちの存在が、すでに不要であるという事実を、認めないようにする為に。

だが、それすらも昨今では覆されかねない存在が確立しつつあった。それは座席正面に形成されたエアリアルディスプレイに、まさに映し出されている。

映像の中、投影されているのは何処かの海原だった。人類が放逐されて久しい海、その水面を、まるでフィギュアスケータのように滑りゆく人影。そのシルエツトは、所々に武骨な構造体を携えている。

かつて、数十倍もの人類が一所に集い、協力して操作していた巨大な兵装。それを圧縮した武装を身体に装着し、それでいて重量を感じさせぬ軽やかさで水上を駆ける、乙女たちの姿。

そう、乙女。理想的な学習能力、理想的な耐久性を持った人工存在に、人類はやはり理想的な容姿を与えた。ニュートが生業とする生体型自律機械技師としての、もう一つの仕事の成果。

神話の水妖精のように、少女たちは画面の中を縦横無尽に駆け巡り、そして敵対する存在に出会せば、背負った武装の数々から、多種多様な攻撃を放つ。

敵、人類の天敵。それは今から六〇年より少し前に、まるで大昔の極東映画に出てくるカイジユウのように、海からやってきた災厄だった。姿を直視することも憚られる、悍ましき怪物<sup>モンスター</sup>。黎明期は人類に多くの犠牲者を出したが、人工物に代役をさせることで、どうにかその侵攻を阻むことが可能になった。

「よし……、いいぞ」

画面に写り込んだ光景に、ニュートは思わず小声で感嘆の声を漏らした。乾いた唇を濡らすべく、コーヒートを口に含む。画面上には、攻撃を受けた少女の一人が、武装と衣服の一部を破損し、悲鳴を上げていた。公共の広報映像ではカットされる箇所。ニュートが見ているのは個人サポーター向けの配信映像だ。ニュートは仕事上で彼らと関わりを持ちながら、同時に一般市民としても、彼らへ投資を行っている。

破損を負った少女はそれでも勇ましく体勢を立て直すと、半裸に近い状態で戦闘を続行する。これは他の港湾警備組織との対抗演習の中継映像だが、ある種の常軌を逸した光景に、ニュートは嗜虐的サディスティックな欲求を大いに刺激されて熱中する。

その後はニュートのサポートするチームの、一方的優勢が続いた。インターバルを挟み、二戦目が行われる。

この分だと、今シーズンは上位ランクを狙えそうだった。ランクが上がれば、その分サポーターに対するリターンも増える。ニュートはサポーターとして、そう少なくとも援助をチームに行っていた。これから味わえるだろう配当への期待、爽快感と満足感の余韻を味わいながら、コーヒーを口に運ぶ。

「……、ん？」

しかし口に触れたのは、空のカップだった。いつの間に飲み干したのか。喉が

強烈な乾きを訴えて、先程までの爽快さが嘘のように困惑が思考を支配する。

……ごぼり……

パネルを押し、もう一度アテンダントを呼びつけようとしたニュートの耳が突然、奇妙な音を聞き取った。本当に奇妙な音だった。それはまるで水で満たされた水槽に、空っぽの瓶を逆さまに沈めた時に生じる音のようだった。少し傾ければ、瓶の口から水が侵入し、押し出された気泡が音を立てて水面へ浮かび上がる。しかし残念ながらこの機内に、水槽の類は見当たらない。

……ごぼ、ごぼ……

だが音は何度も繰り返された。全く奇妙なことだった。ニュートは一瞬喉の渇きも忘れて、音の正体を探るべく耳を澄ませる。そして気づいた。

雨音が聞こえない。

……ごぼぼ……

「う、うわ!？」

突然、右手に冷たいものが触れて、ニュートは驚いて声を上げた。反射的に跳ね上げた腕、読書用のライトに照らし出されたそれは、黒い湿り気を帯びていた。出血か。一瞬不安な想像が頭を過ぎったが、痛みは感じない。

代わりに、猛烈な臭気がニュートを襲った。吐気を覚え、口元を抑える。だが、その抑えた腕、湿った部分からその臭いは漂っているようだった。そして彼はそれが、休暇中に妻や娘とともに足を運んだ、保護特区の海と同じ臭いであることに気がついた。強烈な潮の香り。何故そんなものが、空を飛ぶ密室内に現れるのか。困惑と疑問に包み込まれながら、ニュートはふと、窓を見た。

そして理解を超えた光景に、今度こそ思考を停止した。

「」

窓が、ない。

……ごぼ……

先程まで、分厚いガラスがはまり込んでいた筈のその場所には、何も存在していなかった。いや、それは嘘だ。遮るものが何もなければ、今頃気圧差によって、この機内に満たされた空気は根こそぎ吹き出し、機外のそれと均一化されてしまっているはずだ。それが起きていないのは、その窓枠の空白を、代わりの何か、が塞いでいるからだ。そしてその塞いでいるものが臭気の源だった。

目を凝らせば、機内の灯りを照り返し、窓枠の外側で何か揺らめいたのが見えた。恐る恐る、顔を近づける。しばし観察をしてみても、理解する。

それは膜だった。潮の香りを放つ液体で張られた膜。それが、ガラスを取り去っ

た空白にへばり付き、曇天の空と室内を遮断していた。そしてその膜は、思いの外奥行きがあるようだ。好奇心に駆られて、さらに顔を近づける。

……ごぼ……

「——ッ!？」

すると突然、何かニュートの顔に張り付いた。冷たい何かだ。視界が塞がれ、叫び声をあげながら引き剥がそうと試みるが、まるで海洋生物の吸盤のようにそれは強烈に吸い付いて取れそうにない。パニックに陥る彼の耳が、ずるり、という何かが這いずる音を聞き取る。呼吸が苦しくなり、意識が遠のきかける。

だが急に襟首が掴まれたかと思うと、ぐいつと強い力で身体が通路側へと引っ張られた。同時に、ばしゃ、という音とともに急激に視界が晴れる。呼吸が楽になる。ニュートは床に転がされて、咳き込みながら目を見開いた。

まず視界に入ったのは足だった。

スカートから伸びる、すらりとした細い足。それに沿って見上げると、ちょうどニュートの娘くらいの少女が、そこに立っている。それは離陸直前に騒いでいた少女。娘と同じ美しいブロンドをうなじで結いているが、顔立ちを見る限りはアジア系だ。染色しているのかと思っただが、そうではないとすぐに思い直す。

「*Geltes dir gut?*  
大丈夫？」

こちらを見下ろす、金色の双眸。こぼれ出る金色の燐光。視覚補助レンズによる発色でなければ、その正体は生体人工眼球だ。整い過ぎている容貌に浮かべられた笑顔。『*人助けこそが我らの喜び*』と言わんばかりのその表情は、造顔技師のフェティシズムの限りを尽くされた、理想的な容姿の帰結。

舟を監みし少き女、——

『艦娘』。

映像越しに見ていた存在が、目の前に立っていた。彼女はニュートが無事であることを確かめると、襟を掴んでいた右手をぱつと離した。先程感じた強い力は、この艦娘のものであった。彼らは人類の代理兵士としての役割を果たす為、生体型自律機械として許される限りの運動能力を有している。——それは時に、ローテクノロジーマシン昔ながらの自律機械すら上回る。

そしてもう片方の手には刃の煌めき。シンプルなデザインの、白銀の軍用ナイフ。逆手に握りしめられた刃渡り十五センチ以上のそれは、一部の例外を除き、明らかに航空機内に持ち込むことが許されない類のものだ。握り手と刃の間には短い柄が存在し、その部分に、山吹色に輝く羅針盤のマークが見える。

そのマークが示すものを、ニュートは知っている。

艦娘を束ねる国際軍事組織『海色機関』とは対極を為す研究組織。

人類文明を導く、妖精の羅針盤の担い手。

「——『妖精機関』！」

「Ja mit sind」  
「その通り！」

鈴を打ち鳴らすような返答と共に、虚空に向けて艦娘の腕が閃いた。再び、ばしやという音。少女に迫っていた何かが、その体に触れる直前に切り裂かれた。さらに二度、三度、同じことを繰り返す。その度に生じる水飛沫がニュートにも降り掛かる。悲鳴を上げながらのけぞったニュートの目に、ようやくその正体が映る。

水だ。ニュートの座席の傍にあった窓。そのぼつかりと開いた口から、蛸か烏賊の触腕のような形を成した水が幾本も伸びて、艦娘へ襲いかかっていた。無色透明な、不可視の鞭。辛うじて薄明かりを照り返す輝きでその所在が知れる。

「ああああもう！」

しかし艦娘は悪態を吐きながら、まるで全てがはつきりと見えているかのよう  
に、次々と襲いかかる鞭をナイフでいなす。水はナイフの一閃を受けると、いず  
れも自身を形成する箍を失ったように、ばらばらに飛び散った。だがキリがない。  
ふとニュートは、焦れる彼女の背に、回り込んだ数本の鞭が不意打ちを食らわ  
せようとしていることに気がついた。

「危——」

警告の声をあげようとした瞬間、その鞭が別の閃きに依って叩き潰された。弾  
け散る水飛沫、黒の色彩が、座席を踏み越えて通路へ躍り出る。

「ぼのたん！ 避難終ったの!？」

「ぼのたん言うな！ 終わったわよ」

躍動するブルネットのサイドテール。新たな艦娘が通路に降り立ち、ブロンドと背中を合わせる。その手に握りしめているのは、これもまた、持ち込みを制限されそうな得物。

「あれ、銃は!？」

「こんな密室でぶっ放せないでしょ！ 艦装の空中輸送は<sup>レギュレーション</sup>基本的原則違反だし、

——ならこれが一番よ」

くるくると、その一メートルはありそうな大型ボールが、ブルネットの艦娘の運指によってチアリーダーイングのバトンのように振り回される。そしてそれは適確に、差し迫る水の鞭を叩き落とす。

「アンタこそ、『武功拔群』はどうしたのよ」

「あれは武器じゃないってば」

「刃物でしょ。そうやって中途半端に扱うからから没収されそうになるのよ」

「あれはマジ焦ったね」

水鞭による、打擲。打擲。打擲。打擲。

応じる彼ら、切断。殴打。切断。殴打。

「見えるの？」

ブルネットの問いかけ、ブロンドは「うん」とこともなげに頷くと、左手で『O K』のサインを作り、その円を覗き込む。薄闇の中、金色の燐光が双眸から溢れる。

「あの窓のすぐ外。壁に貼り付いてる、めっちゃ寒そう」

「なら引きずり込むわ」

水鞭の打擲。ブルネットが前に出る。ボールで水鞭を絡め取る。絡みつく。捕えた水鞭は蛸などがそうするように、即座に獲物を引きずろうとする。

だが動かない。

「ぬ、……うん！」

バールを両腕で握り占め、ブルネットの艦娘は、額に青筋を立てながらその場に踏ん張った。座席の基礎部分に足を絡ませ、全身を撓らせ水鞭のパワーに抵抗する。拮抗する。

当然、水鞭は打つ手に出る。

新たな触腕を伸ばす。補強するように、重ね合わせて、振り合わせて、その先端がブルネットの手指にかかる。締め上げようとする。

ブルネットが笑う。

「かかったわね、アホが」

ぴし、という音がする。まるで糸が張りつめたような音。異変に気がついたの

か、水鞭が震えて自発的に四散した。しかしその判断は遅かった。

鞭が消えた後に、ブルネットの手から窓まで、一筋の光が伸びている。

「何だ……!？」

思わずニユートは声を漏らした。そしてすぐに気がつく。

糸だ。銀色の糸。まるで手品のように現れたのは、張り詰めた強靱なワイヤーだ。その正体はニユートには知る由もない。それは窓の奥、水膜の向こう側へ弛みなく伸びている。ブルネットはそのワイヤーを、握りしめていたボールに瞬時に巻きつけた。

「んう……ああッ！」

フィッシュング

そしてまるで釣りのように、両足で座席の基礎部を蹴りつけ、全身の膂力を込めてボールを引き上げる。びしゃりという水音とともに、水膜の向こう側から、

そのワイヤーが巻き付いた何か白いもの——腕のように見える——が飛び出した。

「ひゃっほうさっすがグラウンドフィッシュャーぼのたん！」

「手伝え馬鹿ッ！」

叫び声に、ブロンドがボールに手をかける。そして二人がかりで引き上げた。

ばしゃり、と水音がして、何かが機内へ飛び込む。同時に、凄まじい風と轟音が生じる。水膜を失った機内の空気が小物を巻き込んで機外へ排出され始める。

「マズイ！」

焦りを帯びた声とともに、ブロンドのナイフが閃いた。破壊音が響き、続けざまの蹴り足が手近な座席のヘッドレストを軽々と蹴り碎く。大きな破片が吸い込まれるように窓へ飛び、その表面に引っかかり、貼り付いた。だが、まだ隙間が残っている。

「ほのたん上着借りる！」

ブルンドが厚手のコートを放った。コートは吸い込まれるようにして窓に張り付き、空気の排出が止まった。

「ぐ……この……ッ」

轟音が止むと、再び機内の喧騒が耳に飛び込んでくる。強烈な潮の香り。ブルネットが先端からワイヤーを伸ばしたボールを、釣り竿のように引いている。ニュートはそのワイヤーの先にあるものを見た。

白い

白い髪 白い肌 白い眼 白い耳 白い鼻

白い口腔 白い舌 白い爪 白い首 白い

乳房 白い腕 白い腹臍がない 白い性

器 白い腿 白い膝 白い脛 白い足 白い

「っさいッ！ 黙れクソハゲッ！」

「——っ」

艦娘の怒鳴り声に、ニユートは自身が喉が枯れんばかりに絶叫していたことに遅れて気がついた。喉がカラカラに乾ききっていた。床に手をつき、口を抑えて、喉を抑える。咳き込む。血の混じった唾液が出る。顔を上げる。

「みちやダメだよ」

ふわりと、鼻先をくすぐる花の香り、柔らかな感触。ブロンドの艦娘がニュートの頭を抱きかかえていた。その腕の中で、ニュートは先程脳裏に焼き付いた姿を思い起こす。

乱雑に伸ばされた亡者の腕。そう思わせる真っ白な毛髪。育ちすぎた海藻のようなそれに覆い隠された、水死体を連想する、ぶよぶよとした肉体。それがブルネットの引くワイヤーを掴み、同じようにひっぱっていた。

一瞬にして脳裏を過るのは、海からやってきた災厄。姿を直視することも憚られる、悍ましき怪物、——モンスター深海棲艦。

「だ、誰かつ たすけ、ばけも」

「うっさいつつつてんのよッ！」

「はいはい大丈夫大丈夫」

恐怖に身を戦慄させるニュートの背を撫でながら、艦娘は後ろを振り返る。

「ぼのたん、手助けは？」

「楽勝よこんなの、早くその変態親父シッブフアッカーをどっかぶち込んできて」

「あいよ、っと」

言葉とともに、ニュートの身体が持ち上げられる。並び立てば自身の胸ほどの背丈しか無い少女に小脇に抱えられ、化け物と反対側、機内の後方へと連れて行かれ、座席に放り投げられた。

「じゃ、また後でね！」

艦娘は手を振ると、即座に踵を返し、ブルネットの元へ戻っていく。ニュートはあっけにとられながらも、あの怪物のことを思い出し、震えながら座席に身を隠す。

何にせよ、後はあの艦娘たちが、どうにかしてくるはずだ。そもそも彼らは、あの怪物と戦うために造られた存在なのだから。だが脅威から離れたことで、ニュートは当然抱くべき幾つかの疑問に、ようやく考えが至り始めていた。

何故、海を住処とするはずの深海棲艦が、高度一万メートル上空に現れたのか。  
何故、本来は海上をテリトリーとする艦娘がこの航空機に居合わせていたのか。  
何故、あの艦娘たちの所属が軍事組織の海色機関でなく、妖精機関だったのか。  
……ごぼ。ごぼ……

浮かんでは消える無数の疑問。生来の技術者、研究者としての落ち着き、思考力を取り戻したニュートは、ふと、先程と同じ、奇妙な水音が未だ聞こえることに気がついた。

\*

何もかもがおかしいと、あけぼの曙は眉を顰めて思った。

『ちち　ち　ちち　ちち　ちち』

眼の前の異形からしてそうだ。

目尻から泡立った白い涙を流す、白濁した眼球。  
削ぎ落とされた痕に残る、爬虫類のような鼻孔。  
頻りに「ちちち」という舌打ちを繰り返す口腔。

「気色悪い……ッ」

曙たち艦娘を、どろどろに溶かしたかのようなその容貌は、まさしく深海棲艦のそれといえる。

だが、明らかにおかしい。

曙は自身の任務を振り返る。同僚、さつき 皐月が機内の後方へ避難させた艦娘欲情主義者のクソ人間。独逸の艦娘製造企業に所属する、生体型自律機械技師の彼を追跡し、陰から護衛し、日本へ入国次第、妖精機関としてコンタクトをとることが目的だった。そして、その任務は滞りなく遂行中のはずだった。しかし事は起こった。上空一万メートルの襲撃。当初、学習進化した空母によるものかと思いい心底肝が冷えたが、事はもつと異常だった。

「なんで、なんでよりもよって潜水艦がここに居るのよ!」  
潜水艦。先程から曙がワイヤーの引き合いをしている相手。

空母が飛ばした艦載機なら分かる。それがさらなる制空範囲を獲得し、この高度まで昇ってくるというのは、連中の進化の在り方として考えられなくはない話だ。この航空機が内陸部を飛んでいること、そして各国が配備しているレーダーに引つかからないステルス性を持っているというのも、ありえないことはないのかも知れない。

だが、潜水艦が空を泳ぐというのは、幾らなんでも荒唐無稽が過ぎる。深海棲艦どもが既にそんなことを可能にしているとすれば、人類は今度こそ致命的な廃滅の危機に陥ることだろう。

さらにこの潜水艦は原理は不明だが、水を操作し、それを触腕のように用いていた。実戦に出ている同類たちから、そのような深海棲艦の攻撃手法を聞いたこととはない。だとすれば、その点においてもこの潜水艦はイレギュラーだ。

だから、曙は思う。

「……生け捕り、できるかな」

潜水艦は深海棲艦、艦娘の中でも特殊カテゴリだ。長時間の水中航行を可能にし、その巡航速度は進化の末に水上艦にも引けを取らない。気配を立ち、獲物へ一撃必殺の雷槍を放つ様は、暗殺者アサシンや狙撃者スナイパーにも喩えられる。だが一度彼らが水上、あるいは陸上に出れば、どうなるか。水中に最適化された彼らは、丘の上では木偶の坊と化すか。無論、そんなはずがない。

「ち」

「ッ！」

潜水艦がワイヤーを引くのを辞めた。

機内の床を蹴る。曙へと距離を詰める。

ワイヤーがたわむ。

俊足。

水棲生物の身のこなしではない。

瞬く間に迫る。精確。

視えているわけではない。

聴いている。

潜水艦は音で物を観る。

旋風。

猛烈なハイキックが曙の側頭部めがけて放たれた。

のけぞり躲す。鼻先を掠める。

潜水艦のボックスステップ。こちらも距離をとろうと試みる。

だが引っ張られる。

潜水艦がワイヤーをたぐり、ボールを握る腕が引っ張られる。

つんのめる先。

潜水艦のミドルキック。

頭部がその軌道上へ。

「冗談……ッ」

ワイヤーを解除し、ボールを両腕で構えて蹴りを受ける。

凄まじい衝撃が両腕を襲った。

金属の棒が撓む。

座席後方へ弾き飛ばされる。

血飛沫。目が醒めるような緋色の体液が噴出。潜水艦の指先から。

指が数本、切り落とされている。潜水艦がたたらを踏む。

「はっ、ザマアミロってのよ」

鼻血を拭い取りながら、吐き捨てる。曙の手には煌く銀の糸。それを敵の蹴りの瞬間に絡ませた。

その正体は、開発中の微細資源応用技術の一つ。水分中に含まれる微細資源に指先から働きかけ、ナノレベルの水分子と物質の強固な縦列連続結合を実現。妖精機関で研究されている、カーボンナノチューブ C N T 等に変わる将来の主要建材として、実用を

期待されているもの。それを生成する為の機構を、曙は肉体に器官として移植していた。糸はその強韌性を活かした捕縛能力の他に、形態変形による切断、殺傷能力さえ発揮できる。

それは一度、軍事作戦への非適性の診断を下された自分が得た、新たな特性。何も得ることができなかつた自分が、科学技術へ身を捧げて得た可能性。第二のキャリア。

「舐めんなッ」

ボールを左手で回転。もう片方の手で引き出すのは二本のボトル。スカイラウンジで販売していた五〇〇ミリリットルの炭酸飲料水。スーパーキングウオーターガラス瓶。無論、微細資源が溶け込んでいる。——この世界を循環する水、その殆どに微細資源が行き渡っている。そのキャップを握力で捻り切る。

ボトルを投じて、ボールでベースボールのように打ち抜く。

打球。水を撒き散らしながら直線運動で潜水艦へ。

『ちちちちち』

潜水艦、難なく片手でボトルを受け止める。

握りつぶす。瓶が割れる。水が噴出する。

その死角からボールの先端。

潜水艦、動じず。もう片方の手で矢のように迫っていたボールを側面からホルド。

『ち』

異変。ボールに謎の遠心力。

正体。さらにボールに追隨していた瓶。その先端はワイヤーで結ばれている。

ボールにも結びついている。曙の指先に従い、内部の炭酸飲料水が蜘蛛の糸に変

化。ボールは即席の投擲武器ストリングスウエイトに変わる。

風切りの音とともに、強靱なワイヤーが身体に絡みつく。ボールを手放すも同

じ。ぐるりと腕に、首に、身体に。纏わり付く。ボトルが座席に絡まる。絡みつく。自由を奪う。

曙は指先に接続していたワイヤーの一部から指示。ワイヤーがその意志に従い伸縮し、強烈に締め上げる。殺傷はせず、捕縛に徹する。相手の機動力の減衰に成功。潜水艦の膂力でも、微細資源の結合を引きちぎることは容易に出来ない。座席を破壊し逃れる前に新手が迫る。

「——ボクの出番ッ！」

薄闇を駆け抜ける、山吹色の燐光。

機内後方からの旋風。金髪金眼の駆逐艦・皐月。

両の手に握るのは黒鞘の短刀。

表面に踊るは山吹色の『武功拔群』の文字。

「やっぱり武器じゃないのよ！」

「武器じゃなくて魂だってば！」

左手が鞘を握り腰元に。右手で柄を握る。下向き。踏み込んだ勢いで逆袈裟を狙う角度。それは一呼吸の内に放たれる。潜水艦の膂力で抗うのも無駄だ。妖精の加護を受けた斬艦刀は、鋼鉄の強度を持つ艤装ごと、ワイヤーごと、微細資源の結合を破壊し、深海棲艦を断絶する。

潜水艦が投擲。握りしめていたボトルのガラス片。皐月は容易に躲す。

視えている。皐月の黄金色の視界。妖精機関によって内蔵された視覚器官。彼女の視界は妖精の熟練見張員を数百体束ねた索敵能力を持つ。赤外線紫外線X線ガンマ線、あらゆる電磁波、あらゆるものを視る。見通す。クリティカルヒットの瞬間を決して逃さない。

しかし曙は斬撃の瞬間、巻きついたワイヤーを介して読み取る相手の状況に、奇妙なものを感じ取った。斬撃に備えて身体が強張らない。弛緩している。まるで逃れられることを確信しているように。

確かに捕らえた。彼女の斬撃は直ぐ様四肢を断つだろう。動きを封じて、新種の深海棲艦のサンプルとして採取し、妖精機関の本部へ受け渡す……。

——深海棲艦？

先程の光景を思い出す。糸にかかって噴出した鮮血。赤い血液。深海棲艦は体内を駆け巡る呼吸色素に、鉄由来のヘモグロビンを採用する人類他の哺乳生物、そしてそれを模した艦娘と異なり、銅由来のヘモシアニンを利用している。妖精機関の同僚の脳無しスケアクロウの言葉。つまり、彼らが負傷した場合、本来噴出するべきは赤い血液ではなく、緑青色の血液でなくてはならない。

もし、本当にこの潜水艦が深海棲艦であれば。

「臯月、待って！」

閃光。『武功拔群』の鞘から真つ白の刃が引き抜かれる。地面から天を貫く迅雷のように、それは一瞬の出来事。その一閃は、触れるものを全て切断する。

触れることが出来るならば。

曙は目を疑う光景を見た。迸る迅雷。真つ直ぐに打ち上がるはずのそれが、軌道をあらぬ方向へめちやくちやに捻じ曲げられた。

「え……っ!？」

臯月の疑問の声。曙はその斬撃によって潜水艦に絡みついていたワイヤーがばらばらに切断されたことを感じ取る。まるで見え、ない、レールに沿うように軌道を逸らされた斬撃、しかしそれは巧みに身体を締め付けるワイヤーにだけ触れるよ

うに制御されていた。肝心の標的は肌を舐めるような最低限の接触しかしていない。

「クソッ！」

曙はワイヤーの再形成を試みる。

だがそれよりも疾く、潜水艦の腕が振るわれた。

殴打、そして破碎。

潜水艦の放ったアッパーカットが、無防備な皐月の顎にクリーンヒット。

石弓フリントの矢アローのような一撃。

皐月の頭部だけが垂直に吹き飛ぶ。

天井へ激突する。

ひしゃげる。バウンドする。落下する。

鮮血が噴出する。ヘモグロビンの赤。

脊椎への致命的な損傷。生体人工脳髓も再生不可。

一瞬にして皐月が絶命。首無し of 胴体が膝をつく。

床に落下する『武功拔群』、皐月の魂。潜水艦が踏みつける。踏み躪る。

「あ、あああああああああッ！」

曙の絶叫。激昂。悔悟。標的を見誤ったことに対する自責の念。

敵は正体とともに奥の手を隠していた。皐月の一撃が頭部を掠めていた。その余波、怪物そのものの造詣の頭部の一部が裂けて、その下から本当の顔、本来の口元が覗いている。

口角をつり上げた笑み。

間違いなくそれと判別できる人造の美貌。

通信機を起動する。先程、妖精機関本部へ深海棲艦との会敵を連絡した。

だが違う。敵は深海棲艦ではない。

自分たちと同じ、強化された艦娘だ。

そのことを本部へ伝えようとした矢先、何かが歪んだ。ぐらりと。三半規管が狂う。どちらが下かわからなくなる。どちらも下ではない。あらゆる方向が下だ。

曙は一瞬にして、自身の身体が水平方向に機内前方へ。潜水艦の方向へ落下したことに気がつく。頸を潜水艦に掴まれる。尋常為らざる握力によって、顎から頸部にかけて仕込まれていた通信装置が骨ごと圧壊させられる。

「かつ……、……」

血流が阻まれ、青紫色に変化していく曙の顔を、潜水艦は笑いながら見つめる。小首を傾げる。その仕草は悍ましく、不気味なほどに可愛らしい。

『ちち　　ち　　ち　　ち』

曙は薄れゆく意識の中、足先から身体を包み込み始めた冷たい水の感触に、綾波型駆逐艦・曙の、最期の記憶を再生していた。

\*

同時刻。

某国管制室はブランデンブルク国際空港発、ナリタ行きの航空機一二八便からの、エマージェンシーコールを受信していた。同機体からは一〇数分間に渡り、

断続的に状況が送られてきていたが、突然数分間の沈黙を得た。よもや機体が破壊されたかと、管制室に緊張が奔った直後、再びメッセージが送られてきた。そしてそれは最後の交信だった。

——我ら、『深海棲艦』と遭遇せり。

内陸部、高度一万メートルの上空をゆく機体は、その奇妙なメッセージを最後に、忽然とレーダーから姿を消した。ハイジャック犯による自爆、山間部への墜落、またはメッセージの示すように深海棲艦——巡航ルートを逸れ、海上に突入したために、奴ら海の怪物に襲われたか。

氷雪とともに舞い踊る、妖精フェアリースケイルの欠片だけがその行方を知っていた。